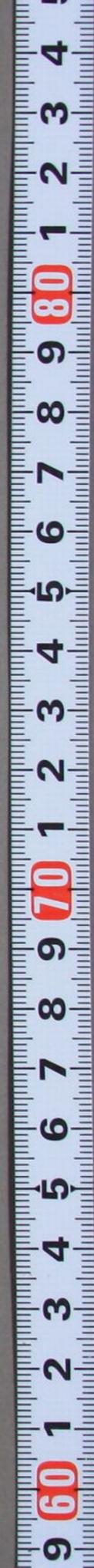




紫女七論



1135

11.9.24

紫女七論

朝夕にみもと
 はなれぬ
 文なれど
 しほしはみせむ
 とくかすしよ

神藤藏書

此系廿七論

附系圖

才德無備

七支共具

修撰年序

文章無雙

作者本意

一部大事

正傳說誤

以上

藤原為章撰



紫家系圖

用院元大臣冬嗣公第六子
良門 内舍人正六位上
贈大政大臣正二位

利基 從四位下右中將

兼輔 從三位号堤中納言
歌人

雅正 從五位下刑部少輔
雅一作惟誤

為賴 從四位下大皇太后宮亮
母石大臣定方女
歌人

伊祐 從四位下讚岐守

賴成 從四位上因幡守
實具平親王男

今按紫日記云中務の宮...のありと云々...
おん...の...の...の...


為時 正四位下越後守或作越前守
儒者(歌人)

惟規 從五位下式部丞
母常陸介為信女

紫日記云このつと成神巫と云人の...
好按遺集に云父のりとは越後...
...の...の...の...
...の...の...の...

惟通 從五位下安藝守

定暹 阿闍梨

女子 紫式部 母同惟規嫁元衛門權佐宣孝
今按宣孝卒後任上東門院

河海抄云鷹司殿從二位倫子官女相能而陪任上東門院又云海氏一部の中以紫

の上のものをすくまわさるる存成部をけりしより、幸成部と号せらるり
今按て書礼云天師の督を任りしに、けりしより、若むと云ふや、
うめ、ひち、す、の、は、是、成、部、と、す、し、く、若む、と、云、は、は、河、海、所、の、
け、後、石、所、の、け、り、又、按、宣、孝、三、圖、は、三、四、二、五、卒、と、け、り、
多に長保三年四月廿五日宣孝卒と云、三四年も、
比、め、り、や、宣、孝、卒、と、云、け、り、久、し、く、河、海、所、所、の、
け、り、し、ゆ、や、打、七、海、の、中、に、記、し、け、り、三、圖、は、
け、り、し、ゆ、や、打、七、海、の、中、に、記、し、け、り、三、圖、は、
け、り、し、ゆ、や、打、七、海、の、中、に、記、し、け、り、三、圖、は、

父宣孝子嫁大貳高階成章同号大貳三位

女子 後一條院御乳母

栄花物語殿上花見巻云内の所々のと大貳三位云

又同上 女子 弁局 後冷泉院御乳母

栄花物語梵王之夢巻万壽二年八月三日後冷泉院御誕生有て、
と、り、か、所、は、大、宮、の、西、方、の、紫、式、部、の、む、す、め、の、
つ、め、り、し、ゆ、や、大、宮、と、上、東、門、院、之、由、の、督、と、
大、宮、と、上、東、門、院、之、由、の、督、と、

二年の内に存生はく大宮よりしと云

又殿上花見巻長元四年九月二十五日上東門院住吉詣供奉の所に云一の車
には尼四人弁尼弁命婦花近命婦少将の尼君二車に侍候のすけ越後の弁
のめれと大捕平少将を懐小弁兵衛内侍御車のありは宣 三位云云
らひりる宣 八源大納言のむすめ三位は地侍の所々のと大貳三位あり
け供奉は、大貳三位存の乳母は、
う、め、り、し、ゆ、や、大、宮、と、上、東、門、院、之、由、の、督、と、

更歌の所々の 瑞政良甚化 云此等成部う原氏白氏の文集云は、
け、後、石、所、の、け、り、又、按、宣、孝、三、圖、は、三、四、二、五、卒、と、
け、り、し、ゆ、や、打、七、海、の、中、に、記、し、け、り、三、圖、は、

紫女七論

其一 才德兼備

世に才徳と云ふは、大丈夫すべし、女は、
 一、才、二、徳、三、徳、四、才、五、才、六、徳、七、徳、
 八、才、九、徳、十、才、十一、徳、十二、才、十三、徳、
 十四、才、十五、徳、十六、才、十七、徳、十八、才、
 十九、徳、二十、才、二十一、徳、二十二、才、
 二十三、徳、二十四、才、二十五、徳、二十六、才、
 二十七、徳、二十八、才、二十九、徳、三十、才、
 三十一、徳、三十二、才、三十三、徳、三十四、才、
 三十五、徳、三十六、才、三十七、徳、三十八、才、
 三十九、徳、四十、才、四十一、徳、四十二、才、
 四十三、徳、四十四、才、四十五、徳、四十六、才、
 四十七、徳、四十八、才、四十九、徳、五十、才、
 五十一、徳、五十二、才、五十三、徳、五十四、才、
 五十五、徳、五十六、才、五十七、徳、五十八、才、
 五十九、徳、六十、才、六十一、徳、六十二、才、
 六十三、徳、六十四、才、六十五、徳、六十六、才、
 六十七、徳、六十八、才、六十九、徳、七十、才、
 七十一、徳、七十二、才、七十三、徳、七十四、才、
 七十五、徳、七十六、才、七十七、徳、七十八、才、
 七十九、徳、八十、才、八十一、徳、八十二、才、
 八十三、徳、八十四、才、八十五、徳、八十六、才、
 八十七、徳、八十八、才、八十九、徳、九十、才、
 九十一、徳、九十二、才、九十三、徳、九十四、才、
 九十五、徳、九十六、才、九十七、徳、九十八、才、
 九十九、徳、百、才、

世の... 世の... 世の... 世の...
 世の... 世の... 世の... 世の...
 世の... 世の... 世の... 世の...

今按て... 今按て...
 今按て... 今按て...

世の... 世の... 世の... 世の...
 世の... 世の... 世の... 世の...

今按て... 今按て...

世の... 世の... 世の... 世の...
 世の... 世の... 世の... 世の...

世の... 世の... 世の... 世の...
 世の... 世の... 世の... 世の...
 世の... 世の... 世の... 世の...

今按て... 今按て...

世の... 世の... 世の... 世の...
 世の... 世の... 世の... 世の...

今按て... 今按て...

是はかりやうにわらへりしやうなきもかきくもあつらんぬ
 偏よらんやうな人——そらよきはよきおのひはつらんぬ
 この御もまたかきくもあつらんぬ

古の御件とまひあひかへるべしに書きしる御言載よか
 らしき御言のよか下りの御用言はするもら成終りか
 まるしきこらあつらんぬにじつりのよかつらんぬ
 ちりよそれ成終り婦徳たしつらんぬ又宣孝の長保
 三年少卒しく成部たすもらたすもら才あつらんぬ上東門院ゆ
 られ鷹司殿のまゆれば呂あつらんぬ言つらんぬよか
 うしつらんぬ成終りあつらんぬのつらんぬ教とつらんぬ

日記 寛 五年

の文 云く殿のまゆればつらんぬにむらんぬはよのちらつらんぬ
 たあもまゆれば殿のちつらんぬつらんぬ御隨のつらんぬ
 をつらんぬのちらつらんぬのつらんぬつらんぬつらんぬ
 たあつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬ
 ちらつらんぬつらんぬのちらつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬ
 つらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬ

今按成終りあつらんぬのつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬ

のつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬ
 つらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬ

つらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬつらんぬ

白鳥: 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

又之行幸: 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

同平十日午方一傳後行幸上東門院而存

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

又云: 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

寛政五年

源氏: 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

上皇の院

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

らぬまゝにうらつておせよと書しり厨子とてしるゝのまゝ
くひにわつてお世帯ももつてみよと書しりあやまるはしむるなり
いとひきゆのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのえつていふ
むつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの
つていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの室者幸後之
今にゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの
きつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの或つては正
はゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの何れ
はゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの
はゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの

今按成給女にて学問好らぬ書るく早く毎のらにあり

たむやく中席ともう後よりかえ

又云五箇門の内侍とて人作りあやうすうらよつたのまゝゆつたの
もえまりゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの一第
のゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの一第
こたまりゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの一第
ほうつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの一第
のあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの一第
まづゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの一第
通つていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの一第
んはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたのあつていふはゆつたの一第

らそれよりこれを父として生まれ其兄惟規も後拾遺よりはしりて
事の集めも入るる方人としてそのものなりひつるを従くふりうへ
忘る所も或部の中きゆえはとううしとてこれに聰明ありて
神童ありけりし一 其二 其さるるまはちうしきとてこれに学文とけり
きののちまふかの学文はまぬとありしあつとき和漢の積書をいふ
音楽以下の書もたてしとてこれに載集云上東門院より
多き里もそまらりたるある廿房のせしとてこのついでに筆つとてあま
しひて作りたるはいつしりたる家或部なり

一 其さるるまはちうしきとてこれに載集云上東門院より

一 禁裏院中中宮

親王持家の後うくにまわりらるゝいて元日節會よりけりあ追離ま至
る所へ恒例臨時一とせのちの或はあ合後らるる合蹴鞠なり後
とあるまゝののうたりにそのまると肥きり 醍醐代もあま上つとて
なりす又衰せりし中華にそと文質ありきる世子生れり 其二 次
磨りうし 位者あるは泊瀬りし毎々作大平野流城にし河
ひうし河は口かんされ乃わたり小野の奥らう海の谷日枝の心とて
嶺ありてあそに河ありあるまて右所舊跡を歴遊しきりしと申是
こなる才氣のますけとあれはかのまは川山せうらあまは父う位玉へ
わりあま時あるの作あるなり 其三 後代よりまはつしとてかたをやくまらうのちの
まてしとて作りたる家ありてまらうしとて申すはあまは父う位玉へ
世のあまらうしとてまらうしとて申すはあまは父う位玉へ

玉うしとてのまは子常陸

のゆきとあるに和祖常陸公為信武に母の...
一羽のきと河ととのに...
そのゆのひらぬ...
も...
およそんや...
ぬ...
う...
に...
く...

其三 修撰年序

日記 寛弘五年 公任卿 云尼瀧門督...
とくうひう...
まき...

今...
流布...
せ...

又曰年云源氏の物語...
今...
...
...

才女と或は女傳言のくまひ同六年にわさのうをわひひり
とありいづく老姫ともみえぬ又うのくまひくまひ
はわうくはりある世ともえす榮花物語源と花の巻に中宮成子
三十三よりせうのゆをさうとまをまをゆのひ念はせ
あうれに物語に或は三十四年ありにて此もくまひ
とひらうくともひ聰敏多ふにひらうくひ不見に功
能す物語あれに此物語もゆのひのゆはたやすくまらぬ
倉一はのんにまきまきつまをひて倒す申ふよ奇好思
儀のありいせうく教書の妙ゆ或は父為時うらうと
或は御堂殿の加筆ありくめくの臆説よりゆをさう
とありい書と考まにゆらうのゆらうとや
源補の長往二年の文は内大臣伊周乃うらうとほひら
かのまほ氏もゆらうとまらんとまらんとまらぬに
ハ長往うを前より出きて世に流布しれいらそ亦深
公と源氏たててまらひらうと答ふゆらうと
花物語と亦深のゆらうとゆらうの処多々ゆらうと
花の亦深や繁より信の人古記をゆらうとゆらうと
て金書とありまらうとゆらうの巻はゆらうと
りてまらうとゆらうと亦深のゆらうと細言ゆらうと
中ねるゆらうとゆらうとゆらうと存生のゆらうと

らひ厚きめのにちりす五條も又同時同輩の花とけりしや
にけすも初花の巻とゆふやうくゆり一布引の庵の巻
ハ塙内院の御世のよき事なり五條り一存生せば百粒十
半ありやうしつゝに長壽のふれをきこうすは和歌赤
染うゆりぬ泡扱多けれども半長らぬいさしきゆり一おら
ゆりく浮世毒傳にこそをきく存生とくはくよとらるゝ
ゆり一とは何人かゆりきこうはしとまうてぬ

其四 文章無雙

物語のちちわう花判ともよ百葉古今仔細物語うつがをけりり
との古體とをあらぬてきつるゆり一に居るゝに居るゝく大

うゝ吾國の風流とつゝしきぬにこそくとして倦むのとあつゝむ
ゆりよるまゝのよき事なりゆり一全篇に為る温潤と喜象やして
宮殿の文章やぬも中に山林お世なり市井國家のり貴國喜情
りり園情風景をよき事なり情をゆり一喜をわくゝゆり一の
ゆり一そくよむひてその所よき事なりし全体はゆり一又ゆり
うゝ序の体なり路なり記なり論なり書なりて諸体とをゆり一
かのゆり一は巻の序はゆり一喜妙なりゆり一の文章うゝゆり一序位とあ
らき免ゆり一時は序とて論破なり論承なり論腹なり論尾なり
幕り細ゆり俗り雅ゆりむき舞ゆり簡ゆりかの間頓挫照
應伏案なりゆりゆり一の文法ゆりつゝとをゆり一のゆり一

悠揚として寛裕よりの文勢に圓活にして婉曲（是所定りしは行はれ一於ては）

史記莊子韓柳歐蘇に等し一なる所（其の筆めては）にらや

一或於いまこそ古今獨歩の文と云ふ（一）しめしは後世といひや

そしめしは後世の言ひや氣快せしはしめしは後世の言ひや

はしめしは後世の言ひや（以上是定）或人の云ふ或部文章は

以て何れも實録を以てしめしは後世の言ひや

論議の類と云ふものも今あるものもや答云是もあつらひき

男子才のりしは嘆息男の言はしめしは後世の言ひや

よそ何れも英才遂めゆものもあつらひき

似つらうき物依りて園門の如く用言と教る則或於て物依り

日記と云ふとして其意と云ふは或於てしめしは後世の言ひや

人こそしめしは後世の言ひや

かきしめしは後世の言ひや

らに或於て平生の用言と云ふは或於てしめしは後世の言ひや

日記に即實録なるが如き物依りしめしは後世の言ひや

りしめしは後世の言ひや

しめしは後世の言ひや

そしめしは後世の言ひや

一箇の如くと云ふしめしは後世の言ひや

たしめしは後世の言ひや

はしめしは後世の言ひや

はしめしは後世の言ひや

はしめしは後世の言ひや

此き一丁筆ありていふにわきい思ふのふゆに御戒のうづらひて
いふもやういふにこそは侍の身は御徳をん遠く傳傳あり
して直く和國の人情風俗をいふと刺とて年々初をまねと感
味深くして母のうづらひいふもいふもいふもいふもいふも
すぢりくありけりには母を侍ら成部をいふも人け誦誦のそり
あり一或部をいふに御戒のうづらひいふもいふもいふもいふも
を多たの権輿はいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
吾國のちもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

其五 作者本意

は物徳のうづらひ人情を述てか中まの御徳用をいふも
るも好色よりいふと刺とていふもいふもいふもいふもいふも
をいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
のちをいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
かいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
人よりいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
きいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

かのあぐに事をとらうけそを待つひ子嬢たや色しうかに
 来りし若紫の巻よめて懐妊とさふ也紅を力貸して御誕生
 ありきの巻は立坊を待つしほく御即位これを冷泉院
 とせゆよそ巻重の巻よ柏原の保の密奉りて朕に密言
 源氏の血子のしとねびりてさうりしをれとも誰に問合
 せたやんともあたまのしりへりしと考なすをえ
 つま^{花文}よしと学問とをなすをいつうの文よと馬後守るはとて
 一いかにちりうれをもとのひもいしりていしと世にのしと
 目もあひるやむ^{花文}に新ありにまひり^{花文}にむりかほりかまを
 ちんすとはりうりしとをいしとあらはしとわらわらわら
 へり

若菜下の巻よ柏原石唐門の女三宮へあぐひたるを源氏

ちりあひりていしと思ある所はつら

かのあぐに事をとらうけそを待つひ子嬢たや色しうかに
 来りし若紫の巻よめて懐妊とさふ也紅を力貸して御誕生
 ありきの巻は立坊を待つしほく御即位これを冷泉院
 とせゆよそ巻重の巻よ柏原の保の密奉りて朕に密言
 源氏の血子のしとねびりてさうりしをれとも誰に問合
 せたやんともあたまのしりへりしと考なすをえ
 つま^{花文}よしと学問とをなすをいつうの文よと馬後守るはとて
 一いかにちりうれをもとのひもいしりていしと世にのしと
 目もあひるやむ^{花文}に新ありにまひり^{花文}にむりかほりかまを
 ちんすとはりうりしとをいしとあらはしとわらわらわら
 へり

あしきまよひ〜密西面の人〜の移るにみひをゆのつらわれ
とつ〜女の心〜かみかきり〜私の上直るゆ〜
の作らぬわつ〜〜相手が三密面ウー〜
よひそむん〜相手が三密面ウー〜
つれが後相手が三密面ウー〜昔は臣氏の心をたて〜〜
たぢひん〜臣氏の心をたて〜〜
身つら〜

今櫻はま〜をゆめい首のよひも又ハ近世のよひも
或はの具〜昔は臣氏の心をたて〜〜
海う〜昔は臣氏の心をたて〜〜
昔は臣氏の心をたて〜〜
學をた物

諫よ花山女御 宣賢云云とくけしたるが筆墨を殿が御 これらに
頃か〜宣賢云云とくけしたるが筆墨を殿が御〜
あ〜宣賢云云とくけしたるが筆墨を殿が御〜
賢〜宣賢云云とくけしたるが筆墨を殿が御〜
讀史管見ハ胡致堂云々を論して云古之有国有家者雖買
妾心擇其良羌胡無禮義廉恥尚且盪腸止世惡族類之
龐也而况諸侯乎何立胤楚悦色納姫不疑其故遂使大
買生販心焉自是有天者盖呂姬也柏翳宗廟至是而
絶云々鶴林玉露小羅大經も〜論して云秦虎視
贅蝨食六国不知六国不滅而秦先滅矣何也始皇乃

しからばちかしく、淳氏の嫡子の罪ありと云ふ皇胤不
たれども、そのあつたに、す相壺の帝の御孫に、
強之神武天皇の御血脉あり、伊勢の宗廟その祀をうけたまひ
天下の蒼生その政せしむるべきに、
院の位をすく、朱雀院の正統に之せらるゝものも、
よからずや、その一旦人倫のそとれと長く皇胤の位と
まこと、
と云ふも、
皇胤のゆゑ、
ゆゑ、

披瀝其の物語より、
心つてたまひて、
二条乃后の密通をゆゑ、
あつた源の執心は、
史記に、
ゆゑ、
の、

しくくしくく又物清よこらぬ源氏とあるは
密なるをいふはきしむかまひし海よいとあそび
ちるしれたらぬまらふしけしこしとわきのたしむ
けりそ部の中の人化ぬ徳をまきしちるふと日記も赤
深少納言和泉を諸人の評したる所とをまて紫に
あきたまつたやうにたれひらるかにけりしりま出たり
物清あはれいよなるしはつるまののこまたま
いふをまらぬ物うらりのちまは道程しよとあそび
いふのなすめはさうあくせんよと書るはと
女の筆はしつちのよの上のまわらぬものかめはら
わのまもあそびのまをうらむとあそびと教蓮
法原うらむもゆい合はるしとわぬの先達のよ
みつゝのまもあそびしつゝのまはらしつゝ
りるしつゝぬるしつゝのまをうらむとあそび
しつゝけあはれし道の程まはしてあそびのまを
るるしつゝとてあそびのまをうらむ

其七 正傳説誤

宇治大納言物清云越前守為時源氏と傳りまはしつゝ
ことごとくをむす免よめせきりたりとそ后の宮のまを
しつゝむすめをとりあそびたりしつゝ源氏つゝのまを

中何たり系つものら此のまゝりしるさうまゝとある人無名

抄云大舟院村上五十宮より上東の院へつましくるまゝの舟屋の物

候やさめらふなりひすめいせをもひりるまは宗成翁をいへ

何ともまゝのまゝと候れはねにりらりまはわにらりら

まきあひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

何らひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

まき候れとこり候れひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

まき候れ物候れひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

まき候れひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

今撰け物候れひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

まき候れひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひひ

徳はきりきりあまらる。且又長保寛弘の以て為時子
く卒しつゝもさるる屋うひ又能日記のりより又うか
かゝるもの業もあはせしむるものあれどもその
筆は損けぬ候されども日記をさすくも
まよふまゝ誤り達しつゝの宮つゝのまゝ年譜を
まよして考ふ事ありし...

^{四條院}長保元年十二月道長公長女彰子入内藤壺十二歳

是上東門院也

二年三月 彰子立后 十三歳

三年四月二十五日 紫式部夫允衛門権佐宣孝卒

四年五年寛弘元年 長保六 二年三年

今様歌マウ中宮へちわりをりらにけ二三年の節あり
下より日記の文と知りし

四年中宮 彰子 二十歳比夏式部子文集の樂府とあり

たより少く文前あり

五年中宮 二十九歳 九月十一日御産 後一条院
御誕生也

紫日記七月の文に云ゆ中宮つゝもりつゝもあはれく
すらすきこゝえつゝもあはれくつゝもあはれく
もてかゝるせしめり 而もあはれくつゝもあはれく
あはれくあはれくつゝもあはれくつゝもあはれく
あはれくあはれくつゝもあはれくつゝもあはれく

去後うらうら父存時とはやうもさうう夫直孝も卒し
うら宮仕もせし里中侍りる屋のり後のついでにうらあ
海をうつらあをらとさううらうらうらうらうらうら
世系公記といふ名につきてうらうら

河海抄云西宮丸大臣安和二年太宰権帥に左遷せられ
まじしう孫成初とさるくうらあれをうらうらゆのひるうらうら
大無陵より上東門院へうつらうらうらうらうらうらうら
うつら牛そやうの物語にうらあれをうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
にわらうら八月十五夜の日湖あめうらうらうらうらうら
に物

海の物語にうらうらうらうらうらうらうらうらうら
大般若の科紙と云るまうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
おてうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
とさうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

今按ら海にもうらうらうらうらうらうらうらうら
あうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
たきうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
百よらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

源範政朝臣の提要といふものも西宮殿の九辻の以
成記といふものも一し生れまゝ前のものありとい
つる冷泉院安和二年より寛弘元年迄といふ十六年あり
紫日記といふものも安和の以成記をまゐらぬものも
襍記といふものも一し一しと西宮殿の
りれりといふものも一し一しと西宮殿の
石山系山籠のりし相名院内府の八月十五夜石山寺小
ての成記の筆とて一昔のり成記ありといふものも一
たるとまたまといふけ後かぬ物語の物語といふものも一
ひけるまゝといふものも一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと

とは成記のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと
楊若せといふものも一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと
一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと
船若といふものも一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと
りしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと
但源氏のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと
りしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと
又云ふものも一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと
新成卿のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと
貞吉のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと西宮殿のりしとて一し一しと

老比丘筆をくわくわくわたりて

今按正徹法師のよし校を信ししは京或於うその代ふ
として藤氏長者海堂岡自嚴筆をくわくわたりて
とまり細流抄のはけ奥書のもをせりけりけり
しうくしんも自然のもありしとけり
あつに自然のうまもあつ一向は寺傳りし
そねによま教るもんし
のうも又あつし
つらばいまの教りし
老比丘の河うし
又寛仁二年は道長公轉入道

して法成寺よこころり
門院へ或於う先年代り
入る教りひますし
戒慢の奥書めきたりし
けあき或於う才を
けりあつし
らゆ弱るきりたうを
ぬゆりし

細流抄云凡日本の國史は三代堂録光孝天皇仁和二年八月
のうを記ししそその國史は物傳を記すよ醍醐の帝り
すは上の日本記よあつしつるるを廣才の新書とす

今按此の如居るも似るものありしをいふは
花の居るもの評もあけひつらんしう考用ひの

又云化者の年をくるとして紅蓮華等の造りしことつひは中道
に實有の性理を悟らうとせの世の世報を成致すと念きなり

今按これな毎ものしを存らうといふはあまた成は
莊子寓言のしうもつらうといひらうしう史記の傳をう
つせうといひ又台家のかいよんは天台の六十卷するを
うら四諦の法門とあひひをせうとありし 儒佛の家
らうつらうといひくうしうはあまた成致うをきうとありし
るはあまたしううむあす四法のじうも中よのあつらう

儒佛のたのびるものありし 淨土をたのびるものありしを
きうらうといひくうしうもそのまゝ儒佛のたのびるもの
ともありしをきうらうといひくうしうもそのまゝをた
て薄らうといひくうしう

寶の如くは奇語戒と説くところうは學成於る實言を以て淨土の居
るをたのびるものありし 地獄のありし 苦患のありしを以て淨土の居
るをたのびるものありし 一日經をきうといふは淨土の居るものありし
を以て淨土の居るものありし 一日經をきうといふは淨土の居るものありし
を以て淨土の居るものありし

今按これいふ中身の奇想ありしとありし薄らうといふは筆は費

あり侯陸中御言の彰考館より李朝王記は右記権記
 九記権記台記玉海玉葉明月紀以下らる世の二水記
 有とす百餘あり此舊記より後言ありや
 不審をそりけりこれと世の事記の事記ハ相つらうこの
 作らるにたぬく世の事記とそりて志はくはらうん 孝悌を
 言ふもらるるまにゆつうそ文体今情態と物記の
 母のむきもたうそ世の事記とそりて七論と孝悌して
 権とそりてけりうらうらう一年紀述にやそ津の文は同
 とうある國務庵於沖ありのうり申きて萬多事集の石
 室と世後 侍り 一つは世の事記の可なりて愚按と符合
 したるも世の事記の侍り 一つは旗の女とたうそら
 ち世の事記の侍り 一つは旗の女とたうそら
 但先達の世を今とて七論ありきんそら多
 作らる又世の人と世とそりて七論あり
 七論あり世の事記の侍り 一つは旗の女とたうそら
 ち世の事記の侍り 一つは旗の女とたうそら
 時よそ後十六年 重陽の日武名少石川の富長が
 七志ありありぬ

安藤石平為章

は茶の申うぬまけりる茶系ありと年山生を号しりてこれ井のそのりか
海一つ都のちぬまらち中より新考館もあつてかぬまらち
文てぬまをいもとくちりりし七論もあつて禁家の隠徳をり
り―物徳の平言をあらわすものきぬまらちのり―千歳のり
うに生じて成於とらぬまのりかぬまらち―海とに生じて禁家
の揚子もあつて海―資権もあつてり―同―館もあつて物徳
の好物の主極中物言の奥入り―り―也是公の岷にもあつてり
ぬまらちのりかぬまらちのりかぬまらちのりかぬまらちのりか
あけぬまらちのりかぬまらちのりかぬまらちのりかぬまらちのりか
るし七平のちちぬまらちのりかぬまらちのりかぬまらちのりかぬまらち

まゝとらうりやうしきとてうもゆりしつらむまのいしる
ををりしつらむゆまにいしよまをたのむとて海うり
あんまれば論かみののうらけ實永まをゆめしよの年とて
これの法書の業をむしきうりのしつらむいしうて成陽
大塚のまゆりしつらむゆまのあをてうもゆりしつらむ
まゝとらうりやうしきとてうもゆりしつらむ

香竹居伴資雄

業とてまうの業乃てうりしつらむ
まゝとらうりやうしきとてうもゆりしつらむ

年山先生安房氏ひろく儒佛の書とてうもゆりしつらむ
日記奇書とてうもゆりしつらむ
えりて成終う女徳をりしつらむ
経典と稱せしむるんけり適者に論ゆて古今
未嘗の諺ありしつらむ
りて業乃てうもゆりしつらむ
講まらうりしつらむ
生のしきを和しつらむ
藤原治之
一とてまのゆりしつらむ
申うりしつらむ

紫家七論一帖水戸相公家臣安藤新介為章所撰也奇評確論可謂物語指南也

尚友軒牧月叟

七論山平有垂乃りしをとりて一帖とせし久留乃りあ天明
きしきいしりしをとりて一帖とせし久留乃りあ

まはれ梅津の里ぬり

梅文はしほるはかりし

楠 径之

七論楠径之宛の事とてうりし一帖ぬ時り文化元年五月
二十日ありん

藤井 径之

日本紀御房考

日本紀の御厨の考

紫式部と日本紀の御厨とひり年ハミヤクニシト記リテオキテ
ミヤクニシタラスニシカニキルコトニテ日本紀ハシテハ
此ハ源氏の物語ト云ヒテオキセテオキテハ人ハ日本紀ニシテ
ミヤクニシタラレタラスニシカニキルコトニテハ人ハ日本紀ニシテ
のクニニシテハ日本紀ノ御厨ト云ヒテハ人ハ日本紀ニシテ
ミヤクニシの中ニシテハ人ハ日本紀ニシテハ人ハ日本紀ニシテ
のクニニシテハ人ハ日本紀ニシテハ人ハ日本紀ニシテ
ミヤクニシタラレタラスニシカニキルコトニテハ人ハ日本紀ニシテ
のクニニシテハ人ハ日本紀ニシテハ人ハ日本紀ニシテ
ミヤクニシタラレタラスニシカニキルコトニテハ人ハ日本紀ニシテ
のクニニシテハ人ハ日本紀ニシテハ人ハ日本紀ニシテ

ミヤクニシタラレタラスニシカニキルコトニテハ人ハ日本紀ニシテ
のクニニシテハ人ハ日本紀ニシテハ人ハ日本紀ニシテ

の君ふつこつう似せぬこゝ世に聞えさるゆゑとせしめしかの化哉
見ぬ人少くもかく思ふ事多の事あるに帝は亦身とせしめ
る事ありしとほろけり命やとおの世つゞくかひひら
ら子源氏天皇は嵯峨天皇よりありしとてつゞけをさるとしそ
るのつゞきとせしにせりて相蓋の帝とて桓武天皇より朱雀院
の帝とて平徳天皇より冷泉院の帝とて仁明天皇よりありしと
つゞき一傳院の帝とてそのつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞき
つゞき日本後紀とてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞき
り奉化とてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞき
つゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞき
つゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞき

紀傳日本後紀とてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
日本紀とてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
免はししとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
を撰誠天皇よりありしとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
思ひしとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
相蓋卷よ高麗人とてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
つゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
つゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
つゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
つゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと
つゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきとてつゞきと

喜帝あるはくしりてちりしんかよひるなりけしにほ物
寛平のころりこあこれ湯代の中ことありと昔より人のあひ
定めしことありあれはまよひにありし書巻ふたつ物居の
くを源氏君の玉つしり君よかちり給ふとほあゆ人のし
まうらうたまたれいひりしんかあられえこなかりし
つやうは舟のふよとあひりしりしをあひりしりし
冷泉院に申てその帝のほくしの中しりしんかあゆのま
よひりしんかよひり物居あひりしんかあひりしりし
しりしんかよひりしんかあひりしりしんかあひりしりし
あひりしんかあひりしりしんかあひりしりしんかあひりしりし

あひりしんかあひりしりしんかあひりしりしんかあひりしりし
人のしりしんかあひりしりしんかあひりしりしんかあひりしりし
いとむしりしんかあひりしりしんかあひりしりしんかあひりしりし
りとりしりしんかあひりしりしんかあひりしりしんかあひりしりし
武天皇第二子平城天皇之母弟也延暦五年生於長岡宮初聰
好書及長博覽經史善屬文妙草隸神氣岳立有人君之量
天皇尤鐘愛也とあひりしりしんかあひりしりしんかあひりしりし
子朱雀院の帝の御弟とえわうくあひりしりしんかあひりしりし
こくしりしんかあひりしりしんかあひりしりしんかあひりしりし
いしりしんかあひりしりしんかあひりしりしんかあひりしりし

このころの嵯峨天皇の源氏君も世のふかむとあはれき事いふし
臨つぬ御心よりふりこく國史と物語を見し志す一相垂卷
小国の方やとて帝王のみなき位子のありき相おしりまふと
いふも天皇もあはれき事このころを原のふりこくなり嵯峨
天皇の太上天皇の尊号をえ給ひて五十七とふ御とに嵯峨院也
しかるにそ給ひて一統後妃と見えき事ふ源氏君も藤原家
卷も太上天皇の御位をえ給ひてふりこくさつとさか
ふとるどみるまひまふとて見あて寄生卷も故院のふせ
給ひてのち二三年をふりのまふとせとむき給ひて一統源院も
六条院もとていふとて人の心をさかむとてふりこく侍りき事いふ

はるも嵯峨院よりふりこく給ひてふりこくかたれ給ひきとあはれ
御年いふとてむき巻も五十二とあはれとむき給ひて雲隱卷も八とせのこと
りこくそのあはれとむきやうくれにむきとむきとむきいふりこく
かたれき事とて又廿三宮の高津内親王もあはれとてむき給ひて
紀も此内親王の御年といふやと嵯峨太上天皇踐祚之初大同
四年六月授親王三品即立為妃未幾而廢良有以也といふとあは
れ一この宮と源氏君の御心とむき給ひてふりこく入道の宮
とむき給ひて良有以也といふと石衛門督のみをこくといふ
とむき給ひてふりこくむき給ひてふりこく上代の嘉智子君もあはれ
とむき給ひてふりこく文徳天皇實録も嵯峨太上天皇初為親王納后寵遇日

隆天皇登祚弘仁之始拜為夫人云云立為皇后云后自明泡幻萬信
佛理とありて功德の事とせむを記してのらつひに居りしや
と見ゆ又同書に后嘗多造宝幡及繡文袈裟窮盡妙巧左
右不知其意後遣沙門慧萼泛海入唐以繡文袈裟奉施定聖
者とありし書と源氏君の思ふこととていふこととていふこと
巻よばしるの事とていふこととていふこととていふこと
勢多むつといふは存ないあまふまふなりてきざしとていふこと
わかしむこととていふこととていふこととていふこととていふこと
志多むつといふこととていふこととていふこととていふこと
大いなることとていふこととていふこととていふこととていふこと

きとあまをたかりしをさへりしはこそとていふこととていふこと
法をまてしとていふこととていふこととていふこととていふこと
いしむこととていふこととていふこととていふこととていふこと
くををるんといふこととていふこととていふこととていふこと
君とていふこととていふこととていふこととていふこととていふこと
帝とていふこととていふこととていふこととていふこととていふこと
りといふこととていふこととていふこととていふこととていふこと
おんといふこととていふこととていふこととていふこととていふこと
の仲成といふこととていふこととていふこととていふこととていふこと
とていふこととていふこととていふこととていふこととていふこと

孝行院の帝も源氏君とありし後まことありしは源氏君の
つらひのいふまじきことなれば源氏君とありしは源氏君の
都より入り給ひて帝の御名をいふは源氏君の御名をいふ
くわきをなせしなりことなれば源氏君の御名をいふは源氏君の
拵とみせしことなりて源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふ
巻よりいふことなりて源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふ
とらふに相原院へ御使ありしありしは源氏君の御名をいふは源氏君の
相原院の帝は此天皇よりありしは源氏君の御名をいふは源氏君の
年が不やけよものいふことなりて源氏君の御名をいふは源氏君の
十三日のみありしは源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の

おまののみそしはもとにたせ給ひて源氏君の御名をいふは源氏君の
みまじきことなりて源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の
よるはもとにたせ給ひて源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の
ふやと給ひて源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の
とらふをいふは源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の
あはれいふのふらふことなりて源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の
の帝は仁明天皇よりありしは源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の
位より即をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の
冷泉院の帝も下の若菜巻よりありしは源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の
のみと源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の御名をいふは源氏君の

可のくるやまをたふし事あらそひくもわらわらむはひぬとてさ
きりしある淳和天皇の御事すしりてある仁明天皇の御事す
たせむいふもとりし源氏君を源氏天皇とすなりとて一と成
あふたしふせんといふものままれとてかきて冷泉院のみうとにま
源氏君の御子なりとて一とひく仁明天皇の御子なり源氏
なりとありせむなりとて一とひくこれのまにありなりとて一と
ひく源氏君の御子なりとて一とひく仁明天皇の御子なり源氏
天皇の誕生三皇子一皇女也寵愛之隆獨冠後宮俄病而因萬
載之小車出自禁中總到里第便絶矣天皇聞之哀悼遣中使贈
從三位也とあり仁明天皇の御子の御事す冷泉院の御事

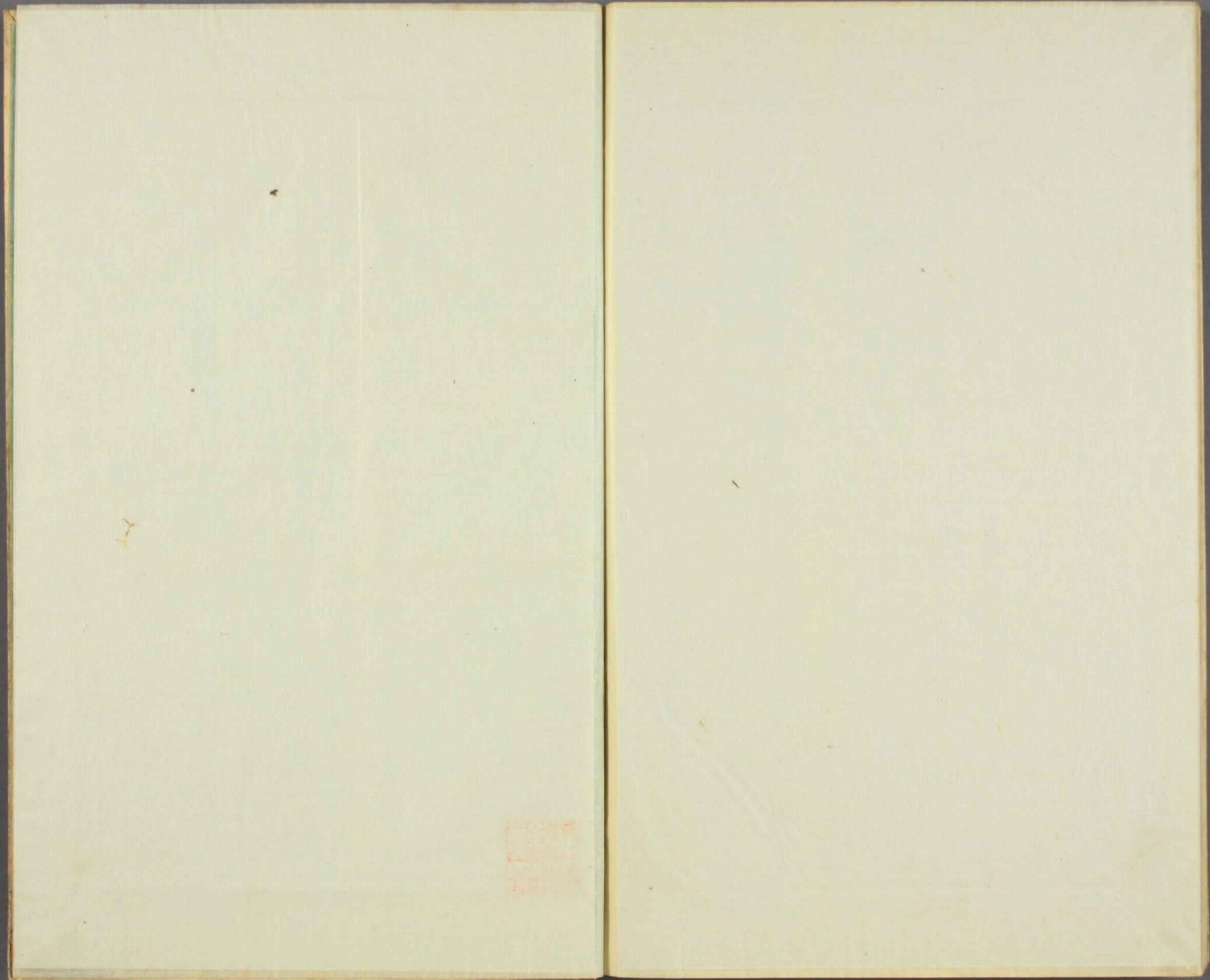
久の御更衣の事すつとて一とひく相堂帝の更衣の事す
たせむいふ御事すなりとて一とひくこれのまにありなりとて一と
ひく源氏君の御子なりとて一とひく仁明天皇の御子なり源氏
天皇の誕生三皇子一皇女也寵愛之隆獨冠後宮俄病而因萬
載之小車出自禁中總到里第便絶矣天皇聞之哀悼遣中使贈
從三位也とあり仁明天皇の御子の御事す冷泉院の御事
久の御更衣の事すつとて一とひく相堂帝の更衣の事す
たせむいふ御事すなりとて一とひくこれのまにありなりとて一と
ひく源氏君の御子なりとて一とひく仁明天皇の御子なり源氏
天皇の誕生三皇子一皇女也寵愛之隆獨冠後宮俄病而因萬
載之小車出自禁中總到里第便絶矣天皇聞之哀悼遣中使贈
從三位也とあり仁明天皇の御子の御事す冷泉院の御事

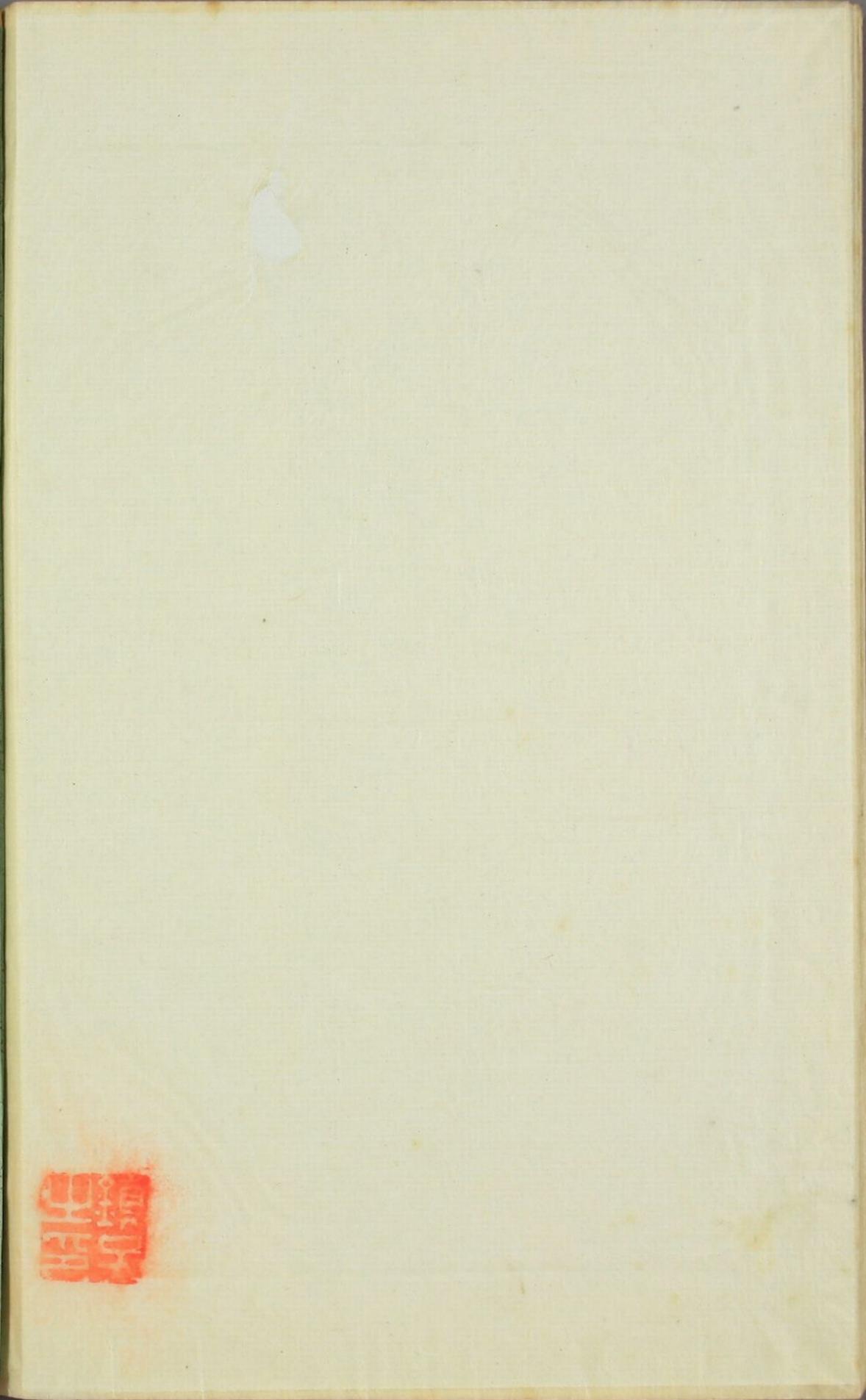
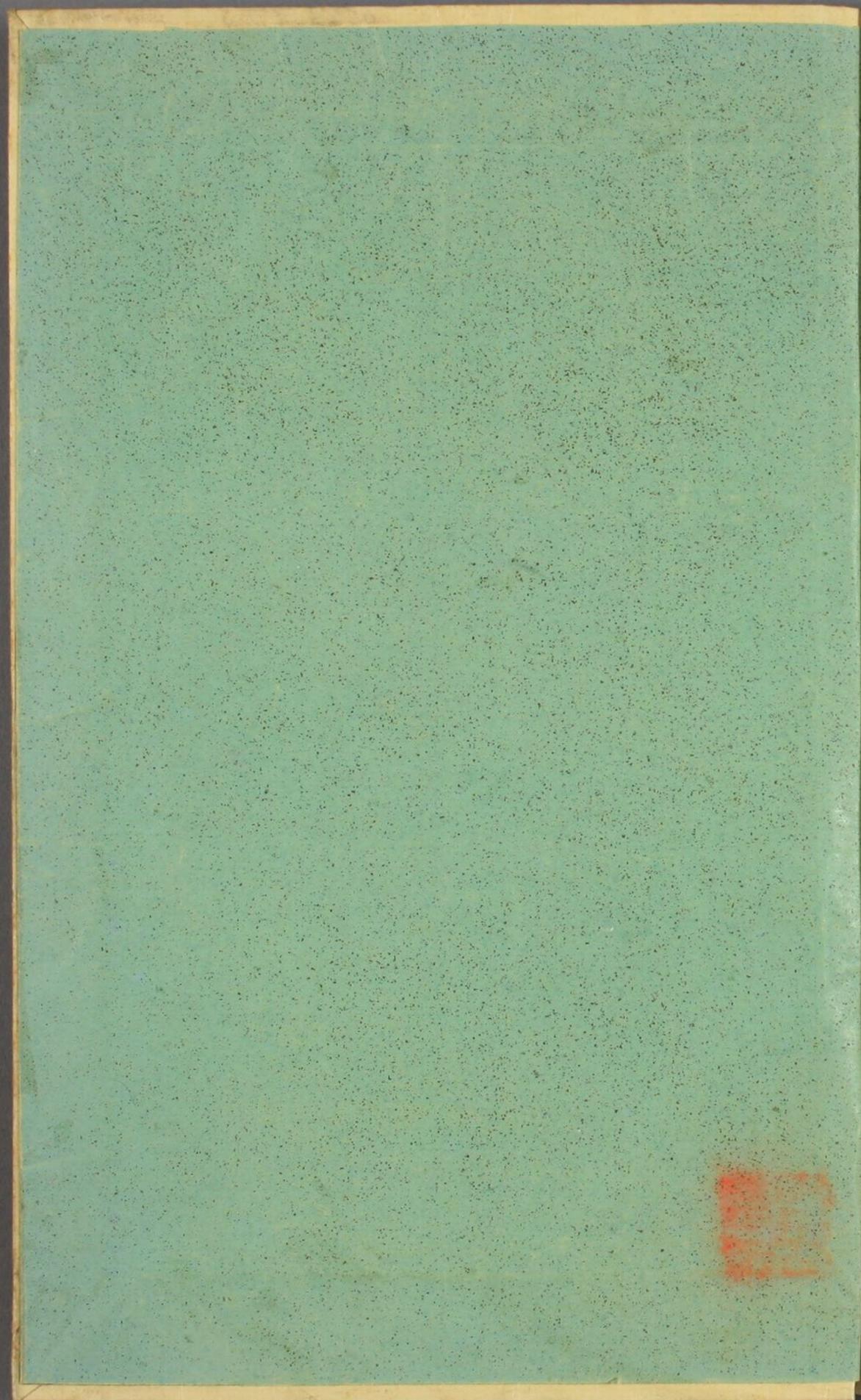
此書に於て述べられたるものなり。其の如しと思はるべきなり
 の如きことゆへに、其の如きことなり。その如きことなり。その如きことなり。
 西の都めて題を定めて、月とに文をく人に高尚の教。とよ
 一、このすうききて、若板の國の小濱の里、小同題の文、
 てたり。つるて、そのものむ、たよ出す、石田千穎
 あさむ、勳を、九月の、古寺紅葉とよ
 きて、其人の文、秋風谷より、吹き、のり、日本紀
 の居の、たれ、一、朝の、と、景、或、紳の、日記、
 より、御、つる、文字、を、つる、つる、つる、つる、つる、つる、
 紀を、日本紀、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、

活化の、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、
 院の、事、見、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、
 志、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、
 つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、
 つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる、

文化八年十月十五日

長岡守藤井宿祢高尚







天

